（夕刊）朝日新聞 1995年（平成7年）3月7日 火曜日

文化

「震源」への問い

市民の活躍に真の民主主義

下からの意志で日本再組織を

九五年一月に襲った阪神大震災は、方向を見失って漂流するポスト・バブルの日本に、追い打ちの痛撃を与えた。先の見えないあいまいな心象風景の背後から、「いまそこにある危機」が現実となって突出してきた。

大地震そのものは自然現象だが、それがどこまで大きな災害となるかは、そこにある都市がどれだけの集積度と防災メカニズムをそなえているかによる。そもそも破壊される都市がなければ、大災害の生じようがない。逆に言えば、この日本で都市を営むとは、「大災害のリスクを覚悟することなのだ。

集積度の高い大都市・神戸は、大きな被害を受けた。マスコミが「つぎは東京だ、対策は万全か？」式の報道を繰り返したので、被災した人びとは、無神経な東京中心主義に怒った。

それはわかるが、神戸よりはるかに集積度の高い東京こそ、ケタ違いの破滅的災害を覚悟しなければならないのも事実なのだ。戦後五十年、ひたすら大都市の集積度を高めてきたのは誤りだったのか？

政府と国民、同等の情報

大勢が一カ所に集まり、さまざまな都市機能がそこに集中するから、時間や資源が節約でき、効率を追求できる。日本経済の発展にとって、それは不可欠だった。地球環境への負荷も少ないはず。集積には合理性もメリットもある。ただそこに、危険も同時に集積されてしまうことを忘れてはいけないのだ。

今回の震災を、関東大震災とくらべてみると、戦後社会の特質が明らかになる。

関東大震災のときは戒厳令が布告され、軍が出動した。新聞社は潰滅（かいめつ）的打撃を受け、人びとは流言に踊らされた。国家の力が圧倒的なのにひきかえ、国民は無力だった。

今回は違う。国家（政府）も無力であることが、国民には手に取るようにわかる。政府首脳と一般国民のあいだに、情報格差はほとんどなくなった。パソコン通信などで、だれでも現地の情報を素早くつかめる時代なのだ。政府や地方自治体の対応はまずかった。自衛隊の出動も遅かった。だが、それを責めてもむなしい。中心不在の統治システムがあたふたするしかないのは、われわれが戦後ずっと権力を忌避・嫌悪してきたせいなのだから。

都市は、効率的で快適である。産業社会の効率は、同じことの繰り返し（ルーティン）から生まれる。ルーティンに慣れた行政は、たまに一回だけ起こる大災害は苦手である。「前例がない」が決まり文句だ。

災害や危機にも直面できる都市づくり、社会づくり、国づくりには、ルーティンを超えた発想、つまり本当の意味での政治が必要になる。これこそ、戦後日本が避けてきたことだった。国際社会に目をつぶり、ルーティンの心地よさに逃げ込んで、災害や危機のことは考えまいとした。憲法が憲法の、自衛隊が自衛隊のままであり続けたのはそのためだ。

それでも災害はやってくる。

国や地方自治体は頼りにならない。とにかく自分たちで、災害に立ち向かおう。何か自分にできることはないか。――じっとしていられず、大勢の人びとが立ち上がった。阪神大震災の最大の収穫は、ボランティアがこれまでにない活躍をみせたことだ。

ボランティアは、ルーティンを超えようという市民の動きである。法律や規則が届かなくても、いや届かないからこそ、あるべき社会・秩序を回復しなければと考えた人びとの自発的な努力である。

混乱から秩序作る市民

問題は、行政が、ボランティアの盛り上がりとうまく接続できなかったことだろう。行政がこれまでの枠組み（ルーティン）でものを考えたのに対して、ボランティアの人びとは、法のないところに秩序を生み出す、潜在的な「自己権力」であった。この自生的な動きがうまくひとつの指揮系統のもとに統合されたなら、そこには、災害や危機とも直面できる国家が生まれるはずである。本来の民主主義国がそうやって生まれたように。

国家は、住民・市民の「自己権力」の延長上にある――この感覚（実感）が、戦後社会には欠けていた。“主権在民”と、教室で何回習ってもそらぞらしかった。ほっておいたのではばらばらな国民めいめいの自発的意志を、その共通項を取り出すことで、一般意志へ束ねていく。そうやって、日本という国家を再組織すべきときがやってきた。

被災むだにせず改革を

海外の輸出市場をこれ以上開拓しても、災害や危機に目をつぶって効率を追求しても、未来はない。長年の制度疲労がたまって崩壊寸前の日本の国家・社会を、住民・市民の自発的で自由な意志の回路としてつくり直していくこと。それが、われわれのフロンティアだ。産業に創造性を、教育に自由を、科学技術に独創性をとり戻そう。すべてのルーティンを疑い、前例や規則を再点検すれば、そして、よいプランを思いついたら実行する勇気を持てば、それは可能だ。

われわれを一世紀あまりにわたって呪縛（じゅばく）してきた、ロシア帝政的一明治天皇制的な後発国「上からの近代化」モデルが、阪神大震災によってつき崩されるのだとしたら、今回の被災も決してむだにはならない。

橋爪大三郎

東京工業大学助教授
（社会学）

はしづめ・だいさぶろう
一九四八年生まれ。東大大学院修了。著書に『民主主義は最高の政治制度である』『はじめての構造主義』など。

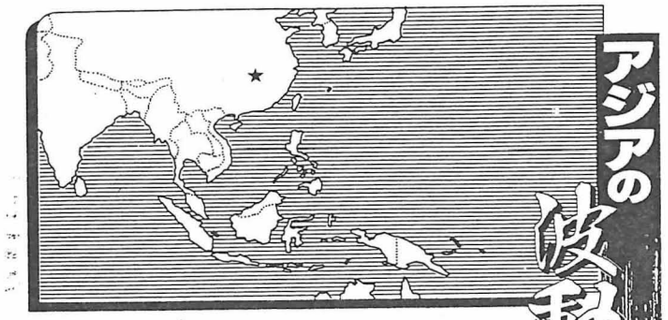
人々は災害に立ち向かい「前例なし」に国家は無力

1995-45-①/9

沖縄タイムス 1995年（平成7年） 2月9日 木曜日

戦後50年

アジアの波動



中国

欧米向いたままの日本

アジアン・ポップスの時代

橋爪　大三郎
東工大助教授

この半世紀、進駐軍のジャズや映画音楽から始まって、日本人はアメリカの音楽ならいちおう何でも聴いてきた。それにひきかえ、アメリカでヒットした日本製のポピュラー音楽は、坂本九の「スキヤキ（＝上を向いて歩こう）」ただ一曲である。このアンバランスは一体何なのか。

ところが、アメリカにまるで入りこめない日本のアイドルも、アジアでは結構健闘している。山口百恵も西城秀樹も、五輪真弓も酒井法子も、それなりに有名だ。「おしん」や「ドラえもん」だって、圧倒的な人気を集めた。どうやら、アジアにはアジアの共感のスタイルがあるらしい。

去年、北京の下町あたりを歩いていたら、聴きなれた喜納昌吉のメロディーが流れてきた。「涙きなさぁい～笑いなさぁい～」という歌声が、たち並ぶ露店と行き交う人ごみに、妙にマッチしている。日本の、それも沖縄の歌ということを、恐らくだれも意識してはいまい。こんなかたちでさまざまな日本文化が、人びとの生活のいろどりになっているとしたら、悪いことではなかろう。

こういう地平が開けつつあるのに、日本人だけが、相変わらず欧米を向いたままだ。アジアの映画も音楽も面白いのに、なかなか受け入れようとしない。これも度が過ぎれば偏見ということになる。

頑固な牛に水を飲ませるには、とにかく一番よいものを飲ませることだ。そう思って私は、崔健（ツイ・ジェン）を紹介する本を書いた（岩波ブックレット）。崔健は、中国ロックの草分け、若者の熱狂的な支持を集めるスーパースターだ。三枚のアルバムは日本でも発売され、一部ではすっかり評判になっている。ちょっと聴いてみれば、日本にはないタイプのスケールの大きなアーティストであることがすぐ判るはずだ。

崔健のシャープな感性は、朝鮮族という彼の生い立ちにも関係あるかもしれない。東京からの距離を常に意識して仕事をしているであろう喜納さんが、彼のロックをいったいどう聴くのか、一度聞いてみたいものである。

〈はしづめ・だいさぶろう　一九四八年神奈川県生まれ。東大大学院博士課程修了。著書に『はじめての構造主義』（講談社）『民主主義は最高の政治制度である』（現代書館）など多数〉

1995-45-②/9

©図書新聞（株）発行

学術

内田隆三 著
柳田国男と事件の記録
2・10刊 四六判238頁 1500円
講談社

柳田の方法の秘密を追う 多重な追走劇

山人／常民の存立と不可分な柳田独特の文体

自然と親和的な人間の像を描き出す柳田の文体が、日本国家を形成した権力の線分と無縁でありうるのか

橋爪大三郎

卓越したミシェル・フーコーの読み手であり、ここしばらくは柳田国男についての研究も精力的に進めている注目の社会学者、内田隆三氏の新著が上梓された。『柳田国男と事件の記録』がそれである。書名の通り、ある心中事件にこだわりをもった柳田国男の方法の秘密を、同じ研究上の必然によって氏も追いかけていく。氏のあとに読者も加われば、本書は多重な追走劇として、複雑な轍（わだち）をえがきながら展開することになる。

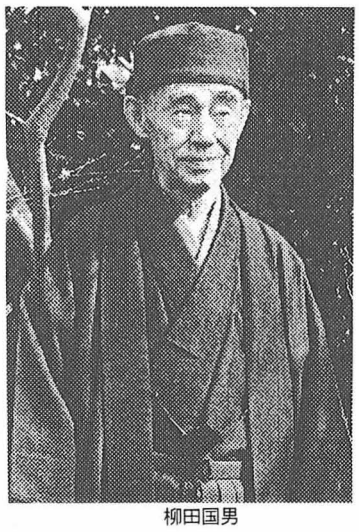
本書は謎解きの常として、まっすぐ結論には到達しない。それに、内田氏の筆は読者に媚びず、むやみに易しくもない。だが、それにめげることなく最後まで読み通すなら、それだけの報いはある。

＊

本書のもとになる文章は、「現代思想」に昨年、三回にわたって連載された。それに手を加えて三章とし、新たに第四章を書き加えたのが本書である。

本書の課題設定は、内田氏の前著『社会記序』（弘文堂）の残響のなかから始まる。常民／山人の対立がそれである。常民とは、日本の伝統社会を構成する、いわば「正則な形象」なのだが、それは、その外部（山人）との対照において成立していた。滅ぼされた先住民ともみえる山人の位置価を確定することが、初期の柳田にとって必須であった。

《柳田はその当時、「日本」の同一性を歴史的に弁証するという大きな仕事に取り組んでいた。それはある意味で明治近代に台頭した国民国家「日本」の自己認識――あるいは自己の創出――の一環をなしていたといえよう。『山の人生』は……そうした試みの危うい到達点であり、同時に重要な屈折点でもあった。》（一〇頁）アメリカやフランスのような憲法制定権力を想定すべくもなかった日本にとって、それは、国家成立の原点をさぐる作業だったのである。


柳田国男

そこで、内田氏が注目するのが、『山の人生』冒頭の「山に埋もれたる人生ある事」という一節である。ここで柳田は、法制局参事官として特赦を担当していた折に読んだ裁判記録の、ある一家心中事件を紹介している。《世の中がひどく不景気であった年》の《小屋の口一ぱいに夕日がさしていた》晩秋に、貧しい炭焼の父親が、飢えに苦しみ「殺してくれ」と哀願する子ら二人をまさかりで切り殺す。そして自分は死に切れず、捕らえられたのであった。

小林秀雄や三島由紀夫をも感嘆させた柳田の筆致は、自然主義文学者・田山花袋の「平面描写」（主観を交えず見たまま聞いたままを描くやり方）の上を行くものだ。内田氏はそこに透徹した《事件を俯瞰する視線》を見る。この柳田独特の文体が、山人／常民の存立と不可分である。それではその文体は、どのように可能となっているのか？

＊

急峻な山腹をジグザグに登っていく軌道のように、着実だがなかなか全貌を見渡せないのが、本書である。それでもそこから二つほど、比較的くっきりしたモデルを取り出すことができる。

ひとつは、社会の原初的状態から共同体が生成するにいたるプロセス。《共同体とは、無限定な他者たちのあいだに展開する社会性の領域から、自己を結節し、形態化し、同時にそのような自己の外部を設定していく、むしろ二次的な社会空間だ》（一一二頁）。ここにはかすかに、マルクス～吉本的な、疎外―生成論の図式が見え隠れする。

そのプロセスは構造主義の《自然から文化への移行の図式》（一一八頁）とも重なっている。《近親姦の禁忌》も《山人への畏怖》も、その移行の境界に位置するのである。

一家心中の事件は、人びとが帰属すべき共同体の外部、《あたかも一種の「自然状態」に追いやられたところで起こっているようにみえる》と、内田氏は言う。ただしここにいう「自然状態」は、構造主義よりもルソーの自然に近いのだという。柳田は事件を、こうした自然の風光のただなかで描き出す。《重要なのは、柳田がこの「人間の自然」を現実に起こった事件のなかから、具体的なものとして発見していること》（一一二頁）だ。

＊

もうひとつのモデルは、言説（文体）の類型学である。事実譚とも説話とも、神話や物語といった類型とも異なる微妙な場所に、柳田の文体が位置しているとされる。

この文体をあぶり出すため、内田氏は苦労の末、岐阜県で明治末年に起こった心中事件の記録を手に入れた。裁判記録は失われていたが、犯人の戸籍謄本と当時の新聞報道がそれである。これに、犯人からの間接伝聞資料（金子定二『奥美濃よもやま話三』）をつき合わせて明らかとなるのは、事実のみを語っているようにみえた柳田の文体も、実は大きな虚構（創作）を含んでおり、事実の変形によってのみ成立していたことだった。このいわばどんでん返しが、第四章のハイライトであり、これまでの柳田論の先を行く新たな成果となっている。

戸籍謄本と新聞報道によれば、心中事件が起きたのは明治三七年の春。それを柳田は、秋の日、飢餓の果ての犯行と描き出す。いっぽう犯人からの伝聞資料「新四郎さ」は、事件の動機を、奉公先で盗みのぬれ衣を着せられ家に戻された娘に求めている。これは、説話の要素を吸収した結果の変形と見られる。

ここで内田氏は注意深く、《柳田の記述には二重の〈排除〉がある》と指摘する。柳田にとって、事件に関わる人びとは《たんなる自然の客体でもなければ、何かポジティヴな動機の主体でもない》（二〇七頁）。このことで柳田の文体は、自然の過酷さ＝情状酌量を要請する新聞の文体や、共同体との葛藤を主題とする説話の文体と異なる位置価を獲得する。

＊

こに柳田民俗学の根拠、方法的な秘密があるという内田氏の洞察は鋭い。それではこの洞察を、どういう全体の構図のなかに置きなおしてみるべきなのか？

今回の書物の主題は、「あとがき」で内田氏も確認しているように《柳田国男の言葉と事件の関係》（二三四頁）に絞られている。柳田の文体（民俗学の言説）が可能にしたものは何か？ 言説とその効果がきちんと測定されたとき、内田氏の分析の射程も明らかとなるだろう。ただし本書は、第四章のどんでん返しで終わっているので、その先は読者がめいめい考えてみるしかない。

そこでためしに、フーコーの言説分析とこの仕事を比較してみよう。フーコーの場合、言説が新たに編成され近代的な主体の形象が形成される過程を暴くところに、分析の主眼があった。柳田の仕事はこれと逆に、そこに主体を結節させない「事件を俯瞰する視線」の文体と結びついている。人間を、そうした自然の境界面に移行しうる存在と規定するところから、ひるがえって共同体＝常民の集合態が定位でき、日本という民俗国家の輪郭が記述できる順序になっている。

しかし、ひとつの疑問は、こうした自然と親和的な人間の像を描きだす柳田の文体が、日本国家を形成した権力の線分と無縁でありうるのかということだ。内田氏も気付いているように、《新聞報道も柳田も、警察の調べや、予審調書、判決のディスクールを共有している》。柳田の「事件を俯瞰する視線」そのものが、明治官憲の権力の作動を前提したものかもしれない。こうして、明治国家権力→柳田の文体→山里の事件→常民＝共同体の記述（民俗学）→明治国家権力の正統化、の円環が生じている可能性がある。こうした自己言及が成立しているのなら、柳田民俗学の実証性はどのように確保できるのだろうか？

この問いに、著者・内田氏がどう答えるか興味深い。本書にその答えはないが、そもそもこの問いにわれわれを導いてくれた内田氏の功績は大きいのである。

（東京工業大学助教授・社会学）

1995-45-③/9

1995年 4月29日（土曜日）

図書新聞 THE BOOK REVIEW PRESS

2244号

発行——（株）図書新聞©
〒101 東京都千代田区神田神保町2-18
電話 03-3234-3471（代）
講読料（送料共）1年48週11,520円 半年24週6,240円 振替東京6-75883番

定価240円（本体233円）

性愛関係を社会的事象として読み解く

ワイセツ現象、性愛の身体技法、婚姻、そしてキリスト教倫理の歴史、さらには日本的特殊性にまで論を敷衍

金塚貞文

▶ 橋爪大三郎 著
性愛論
2・24刊 四六判235頁 2200円
岩波書店

橋爪氏

橋爪大三郎氏は、現代日本では希有な体系的思想家である。なお体系の全貌は詳らかにされてはいないとはいえ、これまでの著作の一冊一冊が、いや、一文章一文章が、体系化をにらんだ気迫に満ち満ちたものであり、それらの一つ一つが、やがて完成されるであろう体系の全貌を遠近法的に浮かび上がらせつつあることは間違いない。しかし、そればかりではない。今回刊行された『性愛論』などは、もちろん体系の一部を構成するものであると同時に、それ自身が、その小宇宙的な体系を構成しているのである。橋爪氏の本を、とりわけ、今回の『性愛論』を読む楽しさというのは、性愛についての体系的な理論的展開を追う楽しさと、さらに、それがより大きな理論的展望（「言語論」と「権力論」）に連なってゆく、その未だ書かれざるものへの推論を垣間見る楽しさの二つから成るものなのだ。つまり、それ自身まとまりをもった論理展開に浸りつつ、さらに大きな論理構成に至るであろう息吹を感じる、要するに、より大きな体系の生成の現場に立ち会っているという知的興奮を味わうことができるということにある。

性愛の分離公理

まとまった体系を成しているということは、けっして難解であることを意味するわけではない。それどころか、少なくとも本書に関するかぎり、その体系性は「論」をより平易に、そして、より説得力に満ちたものにしていると言っても過言ではない。実際、橋爪氏の論理展開はシンプルなまでに平易である。第一章「猥褻論」第三章「性関係論」第四章「性愛倫理」第五章「性愛倫理の模像」、要するに、今回新たに書き下ろされた序章「ひとはなぜ愛するか」第二章「性別論」終章「性愛世界の彼岸」を除いた、一九八二年にすでに起草されていた部分の関するかぎり、その論理展開は、「性愛関係——性愛行為によって形成される社会関係——は、たしかに人間社会の、重要な一成分である。ところがある段階から、性愛関係は、それ以外の社会関係から分離され、それらによって囲繞されるようになった。ぎゃくに言うなら、社会は、性愛行為からの延長ではカヴァーできないタイプの、非性愛的な社会関係（の連鎖）——具体的に言えば、言語や権力——によって、その全域を蔽ったのである。われわれがイメージするすべての人間社会は、性愛関係（の実質である性愛行為）をそれ以外の社会関係から隠蔽し秘匿するような、ある決定的な分解を経たのちのものなのである」という「性愛の分離公理」からの演繹であり、その公理から証明される系に他ならない。この、隠蔽され秘匿されねばならない性愛関係が、それ以外の社会関係との界面に現れてしまうのが、ワイセツという現象（橋爪氏は、法的な意味でのそれである猥褻と区別している）であり、隠蔽、秘匿されるものの内実が性関係であり、そして、分離公理の定式化、つまり、性愛関係とそれ以外の社会関係の分離を、実生活の中で定義づけようとするのが性愛倫理であるという具合なのだ。「性愛の分離公理」という一点から、ワイセツ現象、性愛の身体技法、婚姻、そして、キリスト教倫理の歴史、さらには、日本的特殊性にまで、論を敷衍してゆく橋爪氏の筆力は並大抵のものではない。そして、その公理が、人間の性愛行為を、動物的自然とは全く異なった、社会的行為として位置づけるものであることを考えれば、性愛関係を社会的事象として読み解こうという氏の一貫した姿勢は、「性＝自然」という言説がまかり通る日本の現状の中で、その重要性はいくら強調しても、しすぎることはない。

その意味において、私は、橋爪氏の論陣に全面的な賛意を表するものであり、橋爪氏と同様、人間の性なるものが、社会的歴史的な事象であることが議論の前提になるような、そんな環境の到来を待ち望むものである。

公理自体は無垢か

問題は、しかし、そこから先、と言うか、それ以前にある。「性愛の分離公理」について、橋爪氏は、それが公理であるがゆえに、説明も、況んや、証明も不可能であるかのように語っておられるのだが、いま——ということは、フェミニズムの理論的達成のみならず、アナール派歴史学やフーコーによる、性と身体の歴史についての新たな展開を経た現在——、それを説明不可能な公理と言ってすまされ得るだろうか。性愛の（それ以外の社会関係からの）分離を「公理」といって納得してしまうわれわれのメンタリティとは、ひょっとして、近代的な性倫理にどっぷりと浸ってしまったわれわれのそれなのではあるまいか。性愛、そして、身体（性別そのものを含む）が、いかに歴史的に相対的なものにすぎないかを、この間の新たな歴史的研究から知ってしまったわれわれは、そう自問せざるを得ないのである。性愛行為が隠蔽され秘匿されねばならないというのが、仮に人間社会に普遍的なものだとしても、そこで言われている「性愛行為」なるものが、仮に人間社会に普遍的なものであるのかどうか、むしろ、歴史的に多様な意味をもっているのではないかと考えるべきではなかろうか。そしてさらに、仮にそれが公理であったとしても、その公理自体が無垢であるのかどうか、男にとっての公理と女にとっての公理で違いがないのかどうか、それが考察されねばならないはずである。

新たに書き下ろされた部分に、私は、そうしたことに対する回答を期待した。しかし、そこで、「性愛世界。それは、人間が互いにかけがえのない身体と身体として直接に出会うところから始まる世界であった」「愛はどのように修飾され、精神化されようと、その根本は、他者の身体を求める自分の身体のダイナミズム（欲動）にある」「性愛のダイナミズム（いわゆる性欲）は、もちろん、人間が有性生殖をする動物であるという条件に由来している」といった文章に出会ったとき、私は戸惑いを覚えざるを得なかった。そうした性愛の本質主義こそ、まさしく、現代的な性倫理の言説そのものであり、それこそが、性愛世界を隠蔽し秘匿する合理的根拠となっているばかりではなく、性愛と身体の歴史性を隠蔽し秘匿してしまうものに思えるからである。せっかく「性＝自然」という常識論に反旗を翻したはずの『性愛論』が、これではかえって後退してしまっているように思えてならない。

私は、本書とほぼ同時期に刊行された二冊の本、江原由美子氏の『装置としての性支配』と、伴田良輔氏の『別冊宝島・二〇世紀の性表現』を合わせて参照しつつ、こんなことを考えてみた。橋爪氏の言う「性愛の分離公理」は、歴史的社会的に普遍的なものであるどころか、むしろ近代以降の歴史的社会的、イデオロギー的な「装置」に他ならず、この公理＝装置こそ、女なるものを身体ごと（あるいは、女の身体なるものを作り出し）、公共世界から性愛（家族）世界に隔離する当のものなのではあるまいか、と。そして、人間社会には、「性愛行為をそれ以外の社会関係から隠蔽し秘匿するような」力と同時に、性愛行為を公開し明示するような力もまたはたらいているのではなかろうか、と。そうした逆方向の力なくしては、ワイセツ現象も存在し得ないだろうし、分離公理が倫理として存在する必然性もないであろうからである。

しかし、こうした公理の歴史性、性愛行為を明示しようとする力、そうしたものについて語ることを、『性愛論』に求めてはいけないのだろう。そうしたことは、橋爪氏にとっては、おそらく性愛世界の言語ではなく、それを囲繞する世界の言語、言わば、そのメタ言語によってしか語り得ないものであり、それゆえ、言語論と権力論が完成した後、全体系の中で、改めて語り直されねばならない問題なのであろう。予告されている『性空間論』の完成を、私は期待している。（評論家）

毎日新聞（夕刊）　1995年（平成7年）12月25日（月曜日）

1995-45-④/9

文化　批評と表現

「この1年」を振り返る

仮想現実に自閉する言論

阪神大震災、地下鉄サリン、円高・不況と、九〇年代の低迷をダメ押しする事件が今年に集中した。八〇年代消費社会・バブル狂乱のツケで、国内経済は停滞し、のたうち回っている。同じことが国内言論・ジャーナリズムについても言えるだろう。

消費社会は、人びとの欲望を際限なく増幅した。いま人びとはなにを欲しているか――消費社会のメディアが伝えたのは、要するにこれである。知的な言論それ自身も商品となり、流通するなかでファッションと化した。国内言論は現実との接点を見失い、自閉の構造を深めていった。

九五年の大事件はどれも、こうした自閉の構造に対する「外部からの一撃」だった。地震は自然現象、オウムは出家教団、円高は海外市場。国内言論のコントロールの効かない場所が震源となって、メディアの増幅してきたかりそめの「仮想現実」（バーチャル・リアリティー）を揺るがせたのだ。

本来ならばここから、世界の現実を踏まえた新たな言論が立ち上がるべきである。しかしメディアは、これらの事件を「広告代理店を通さぬ安上がりな、視聴率の取れるイベント」としか受けとめなかった。リポーターやコメンテーターが東奔西走し、忠臣蔵の外伝さながらに、あれこれの登場人物のエピソードがほじくり返された。「ロス・疑惑事件」以来の、スキャンダル・ジャーナリズムのやり口の繰り返しである。

スキャンダル・ジャーナリズムとは、出来あいの善悪図式を、現実に押しつけてこと足りとすること。子供じみた気休め、はっきり言えば、いじめだ。そこで、悪の役割を押しつけられる「犠牲者」が必要になる。たとえば、宮崎緑さん。震災直後の現場を「毛皮のコートを着て取材し、ひんしゅくをかった」と、女性週刊誌などでたたかれた。災害の現場に急行するさなかに、普段着をみすぼらしい身なりに着替えるとしたら偽善だ（毛皮のコートで何が悪い）と私は思うが、本人に確認したところ、「毛皮のコートを着た事実はない、放送を見れば明らかですよ」のこと。その後も「オウム幹部に花束を渡した」（これも事実無根）などと、バッシングはさらにエスカレートしている。

もっとひどいのは、島田裕巳さんの場合である。地下鉄サリン事件このかた、教団の犯罪性をなぜ見抜けなかった、という八つ当たり的非難が島田さんに集中していた。そこへスポーツ紙が「教団からホーリーネームをもらった」と報じたので、テレビやマスコミで袋だたき状態に。信者でもない島田さんに、かりに教団が一方的にホーリーネームを与えたとしても、島田さんに何の責任もないはずである。それに私の知る限り、これは全くの誤報で、その事実を裏づける何の続報もない。（またゼミの学生が信者となった件も、『AERA』一〇月一六日号の通りで、島田さんに直接の責任はない）しかしこれがだめ押しとなって、日本女子大は島田教授に休職を命じ、島田さんは辞表を提出した。「世間を騒がせた罪」としか言いようのない理由で学者が職を奪われるという、「学問の自由」と正反対の状況を、マスメディアが自らの手で作り出してしまった。

こうした犠牲者がつぎつぎ生み出されるのは、マスメディアが、現実をとことん掘り下げる代わりに、ステロタイプの図式を現実に押しつけてすませているから。そして人びとが、そうしたスキャンダル・ジャーナリズムの与える仮想現実に安住しているからだ。

マルチメディア時代が幕を明け、情報通信が爆発的に拡大している。だがそれは、ステロタイプの図式を拡大するだけではないか。今年の四月、「新宿に何かが起こる」という正体不明のメッセージが、パソコン・ネットをかけめぐった。よくない兆候である。

日本のジャーナリズム・知的言論はこのまま、仮想現実のなかを流され続けるのか。それとも、現実に立ち向かうまともなスタンスをどうにかとり戻せるのか。正念場の分岐点に、われわれはさしかかった。

（はしづめ・だいさぶろう＝東京工業大学教授・社会学）

橋爪大三郎

かんきょうライブラリー

『産業と環境』1月号第25巻1号　1995.12.20発行　pp. 102 通産資料調査会　おまけ

『科学技術は地球を救えるか』

橋本大三郎・新田義孝編著／富士通経営研修所刊／定価二、二〇〇円

本書は九五年三月に開催された「科学技術フォーラム：自然科学と人文・社会科学とのパートナーシップII」（科学技術庁主催）の分科会の一つである「人類の生存と科学技術」での討論をもとに新たに書き下ろしてまとめられたレポートである。環境問題の解決にむけて科学の新しい方向性を探ったもので、出席者（一五名）の専門分野は、社会学、国際経済論、水理学、大脳生理学、放射線生物化学――と多彩だ。

第一部「地球環境問題をどう理解するか」、第二部「生命から地球環境を考える」、第三部「中国からのメッセージ」、第四部「持続可能な未来への社会システム」の四部構成で、第二部がユニーク。例えば吉川研一・加藤陽両氏（物質生命情報学）は、自然や生物の行っている現象と「非線形関数」の密接な関係を指摘、従来の科学技術文明は理路整然とした線形の数学を前提にしてきたが、「持続的発展」とは、混沌にみえる「非線形」の発想をとりいれた科学技術文明の構築によるものではないかと指摘している。

一方、第四部の西山賢一氏（文化生態学）は、持続可能な社会を考える新しい経済学の可能性として、エントロピー経済学、生態学的経済学、制度主義を紹介。制度主義は慣習・習俗・ルール・文化といった理路整然とした法則では割り切れない要素が経済活動に果たしている役割を解明することを課題としており、先の吉川・加藤両氏の論文と通じるところがあり、興味深い。

この例のように一見関係なさそうな学問分野が環境問題という接点で通いあう点が出てくる様子が読んでいて面白い。環境研究の今後の可能性を示唆しているといえよう。

夕刊
中日新聞東京本社
東京都港区港南2丁目3－13
電話 (03) 3471－2211
〒108 郵便振替00150－6－7527
1995年（平成7年）12月14日（木曜日）

1995-45-⑧/9

『九五年危機』考

メディア状況しのぐ知的言論は可能か

橋爪　大三郎

阪神大震災、オウム・サリン事件、円高と長引く不況……。続発する大事件に翻弄され、言論界は現実のあと追いが精一杯の一年だった。本来ならばメインとなるべき戦後五十周年の特集や催しは、すっかり影が薄くなってしまった。

多難なこの一年を、日本の「九五年危機」とよぶべきだろう。一九四五年から半世紀が経ち、構造疲労が積もりに積もった日本社会を、ポスト冷戦の大波が直撃して、この危機はひき起こされた。以下それを検証しよう。

地震がいつどこで起こるかは、自然現象である。しかしそれがどれ程の災害をもたらすかは、そこにどんな都市があるか、つまり、人間社会の問題だ。今回、政府も自治体もマスコミも地震になすすべがなく、危機管理の甘さを露呈した。こんなことで日本は大丈夫かという不信が、世界に植えつけられた。

地下鉄サリン事件がオウム教団組織ぐるみの犯行だったことが明らかになり、国民はショックを受けた。教団幹部には、まともな高学歴の人びとも多い。そういう彼らが企業や学校から、奇怪なカルト教団にひき込まれて行った。彼らの予備軍として、オカルトや超能力を信じがちな沢山の若い人びとが控えている。戦後教育が、どこか根本のところで誤っていたと思わざるをえない。

不況も相変わらず先が見えない。バブル景気の反動に加えて、国内のコスト高を敬遠して海外に生産拠点を移す空洞化や、金融不安を抱えた日本経済の信用力低下も重なっている。戦後の経済成長を支えてきた冷戦の世界秩序は、もはや過去のものとなった。

村山政権の迷走も、国民をやり切れない気持ちにさせている。ベルリンの壁が崩れ、ソ連・社会主義圏が解体して、社会主義を理想とした社会党も、政権を渡さないぞと頑張った自民党も、歴史的使命を終えてしまった。羽田、小沢といった改革志向グループが自民党を飛び出したのもそのためである。それにストップをかけようと、予想外の自社連立政権も生まれた。まさにポスト冷戦時代を象徴する、新たな構図だと言えよう。

こうした混乱のなか、日本人の誰もがこれから進むべき方向を見失っているのが、「九五年危機」である。

こうした方向感覚の喪失は、実は八〇年代から目立っていた。「ロス・疑惑の銃弾」報道を境に、スキャンダル・ジャーナリズムが日本を支配した。それは、松本サリン事件では第一通報者を犯人に仕立てあげた。地下鉄サリン事件報道では、視聴率のとれる教団幹部がテレビ局で引っ張りだこになった。

大衆に見たいものを見せ、知りたいことを知らせるのが、スキャンダル・ジャーナリズムの本性だ。視聴率、売り上げのためなら何でもする。メディアはますます、「いま人びとが何に興味をもっているか」を増幅して伝えるだけになる。そして、どこまでも閉じていく。その場限りの笑いや目まぐるしい流行がテレビ・雑誌を占領し、真面目でまともな言論ほど片隅に追いやられている。

オウム・サリン事件がここまで国民の注目を集めたのも、こうした現状と無関係ではなかろう。オウム真理教は、まともな仏教やキリスト教と似て非なるもの、過去の正統な思想とつながりのない教義の寄せ集めである。「米軍の毒ガス攻撃」など、奇妙な反米感情も混じっている。日本人の多くがブラウン管に釘づけとなったのは、そんなオウムに自分の似姿を見たからではないか。

マスメディアは現在を増幅し、過去に蓋をする。人びとは歴史を見失い、時間軸を喪失する。また、めいめいの欲望を増幅し、他者を見えなくする。そこで人びとは国際性を見失い、空間軸を喪失する。今年も失言で大臣が辞職した。だが、歴史性、国際性を欠いているのは、大臣だけではないのである。

時間軸・空間軸のあいまいなマスメディアは、いわばヴァーチャル・リアリティ（仮想現実）をふりまくことになる。メディアに支配された日本社会の希薄な現実感覚が、オウム真理教を生み出した。われわれにオウムを笑う資格はないのである。

本格的なマルチ・メディア時代を迎え、情報はますます速く、大量に移動し始めた。これを踏まえずに、知的言論は展開できない。さらに知的言論そのものも、メディアの中の商品として流通することを宿命とする。つまり、不断にマスメディアの価値観に足元を掬かされる場所に追い詰められている。

こうした知的言論の使命は、メディアに依存しない明確な「外」（時間軸と空間軸）の所在を、人びとに提示することだろう。それは、歴史と文明の世界標準を踏まえた、強烈なリアリティを日本のマスメディア状況につきつけることを意味する。知的言論とマスメディア、どちらのリアリティが勝るか――そうした血みどろの格闘を見せてくれる本格的言論の登場をこそ、来年は期待したい。

◇

はしづめ・だいさぶろう　東京工業大学教授。社会学専攻。一九四八年生まれ、神奈川県鎌倉市出身。東大文学部社会学科卒。同大学院博士課程修了。著書に『言語ゲームと社会理論』『冒険としての社会科学』『現代思想はいま何を考えればよいのか』など。

文化

中根　のり子・画

『ダ・ヴィンチ』9月号通巻17巻
1995.8.6発行　リクルート　おまけ

今月のダ・ヴィンチ注目本64

『大問題！ Q＆Aでわかる世紀末ニッポン』
橋爪大三郎　幻冬舎　1400円　発売中

気鋭の社会学者・橋爪大三郎が、阪神大震災やオウム事件などの複雑なニュースをQ＆A形式でズバリ解説。「ゴーマニズム宣言」の中でも紹介された（「SPA！」6/14号）小林よしのり氏との対談も収録。（賢）

1995-45-⑥/9

『天津日報』向け・栄養食品の原稿（日本語）　1995.5

商業主義に騙され、鍛えられ、消費者は賢くなった

橋爪大三郎

栄養ドリンク・健康食品・ビタミン剤のたぐいが市場にあふれ、広告戦争を繰り広げているという。中国がますます成熟した消費社会に向かって歩みつつある証拠だ。

同じような状況は日本でもあった。中華人民共和国建国の一年前に生まれた私は、戦後の日本資本主義の復興・発展とともに大きくなってきたようなもの。その私から見た、健康食品事情のあれこれについてお話ししよう。

敗戦前後の日本の食糧事情はひどいものだった。餓死者が数百万人出ると言われたが、それほどひどいことにならずに済んだのは、アメリカ占領軍の食糧援助のおかげである。私は幸い、飢えに苦しんだ記憶はないが、小学校の給食室の裏手に回ると、援助物資の粉ミルクの箱が転がっており、お湯に溶かしたまずくて白い液体を飲まないと、先生にひどく怒られた。栄養はあったろうが、アメリカではブタの餌なのだという。

小学生のあいだに、テレビが見る間に普及した。子供はアニメに、そして広告に夢中になった。気がつけば街角から子供たちの歓声は消え、時間に追われて塾に通う「小皇帝」ばかりになっていた。

カレーライス、スパゲッティ、焼きそば、ハンバーグ、インスタント・ラーメン。テレビで広告され、工場で大量生産される食品が、子供の好物になった。ガム・キャンデーやスナックの類いも売れ始めた。高蛋白、高カロリーだが野菜は少ない。しかし当時は、砂糖の消費量が先進国の証とされ、肉食を増やせばアメリカ人のように体格がよくなると言われた。その結果が、肥満児や子供の成人病の激増である。

子供が変われば、大人も変わった。会社が働き疲れ、帰宅してテレビの野球中継を見れば、中年男性向けの健康ドリンクの広告。ホームラン王の王選手（華人）が、ブラウン管からにっこり笑いかける。接待で料亭・バーを梯子しなければならないから、食べ過ぎ、飲み過ぎの胃腸薬も必需品だ。働け、働け、高度成長まっしぐらの六〇年代だ。

七〇年代、石油ショックと公害問題で、高度成長に影がさす。水俣の水銀が、魚を汚染した。農薬も危ない。自然食品、健康食品がブームになった。山岸会（自然食を生産する宗教団体）の有精卵もとぶように売れる。無精卵とどう違うのかわからないが、値段だけはしっかり高い。健康ビジネスの誕生だ。

所得が増えれば、消費構造も変化する。寿命はのび、エンゲル係数は急降下した。代わって増えた支出は、教育費と医療費だ。ダイエットも花ざかり。食べれば太る、食べないことが健康だ。コンビニのお弁当かレトルト食品、さもなければレストランで食事。ダイエットのやりすぎで身体の調子が悪ければ、機能性食品（ミネラルやビタミンを専門に補給する食品）を食べればよい。やせるかもしれないというので、缶入り中国茶の売上げも驚異的に伸びている。

怪しげな健康法も流行する。ロシアから伝わった紅茶キノコ（紅茶を好む菌類の一種）は日本中の台所で栽培され、捨てられた。ジョギングもエアロビも、大極拳や気功もブーム。有名な歌手・美空ひばりは、中国茶を飲めば長生きできると言われて真に受け、早死にしてしまった。外国の健康法がよく見えるのは、どの国も同じらしい。

日本人の平均寿命が世界一なのは、こうした健康法のせいではあるまい。保険制度を整備して誰でも医者にかかれるのと、食事に油を使わず量も少ないためだ。この点、アメリカは困ったものだが、中国の食事の仕方も、われわれにはぜいたくすぎると映る。

健康はすべての人びとの願い。しかし、経済が豊かになると、その願いを喰い物にする商業主義が現れてくる。健康の基本は、規則的な食生活と科学的な知識、その原点に立ち戻ることが、自分の幸せを自分で守る道なのだ。

（日本・東京工業大学教授・社会学）

天津日报　专刊・副刊【Special Column・Supplement】

1995 年 5 月 31 日　星期三　第十版

老外的保健观念

健康源于规律的饮食和科学知识

最近中国的市场上涌现出各种大量的保健营养品口服液、维生素制品等等，这证明中国的消费社会越来越走向成熟。日本也有过同样的情况。在四十年代末五十年代初，西方的食品进入日本，如咖哩饭、意大利面、汉堡肉饼、方便面……在电视里面作广告，在工厂中被大量生产，成了孩子们最喜欢的食品；口香糖、炸土豆等小食品也开始大量出现，高蛋白高热量，可蔬菜太少。但当时却认为，糖的消费量是先进国的证明，人们相信多吃肉类会像美国人那样体格健壮。这样的结果，造成肥胖儿和孩子中的成人病的增加。七十年代，石油危机和各种公害问题，造成了对高度发展的影响。水银、农药等造成了各种污染。那时，自然食品、健康食品一下子达到了高潮。人们的收入增加了，寿命的延长，同时减肥也出现了。大家都认为，吃了会胖，少吃是健康的。减肥过度引起了各种身体不适，于是又出现了「功能性食品」，即矿物质和维生素等专门补给的食品。都听说中国茶可能减肥，一时间中国茶的饮料又卖得惊人。各种奇怪的健康法也曾流行，从苏联传来的红茶蘑菇，在全日本厨房里栽培，最后也被摈弃。长跑、跳现代舞、打太极拳、练气功也风极一时。日本有名的歌手美空云雀听说喝中国茶会长寿，完全接受一直喝，却早死了。只要是外国的健康法就是好的，哪个国家都容易这样认为。日本人的平均寿命是世界第一的，并不是以上的健康法的原因。我认为完善的保健制度是使所有的人能及时看医生和饮食中尽量少用油，以减少脂肪的摄入。这一点美国是根本办不到的，但中国的饮食习惯我们也认为真太奢侈了。健康是每个人的愿望，但是经济丰富了这个愿望就被忽略了。我认为，健康的基本原则是规律的饮食生活和科学知识，从这个原则出发，就是自己的幸福，自己的保健道路。

日本东京工业大学教授　桥爪大三郎

1995-45-①/9

検証 宗教と暴力

オウム事件から

橋爪　大三郎氏に聞く

自らの「救済計画」押し通すために

テロによる支配必要に

切迫感が在家者との間に壁作る

――オウム真理教の事件でクローズアップされたのが宗教団体の暴力性だ。全容の解明にはなお時間がかかるにしても、宗教と暴力の結びつきに人々は驚いている。西洋では宗教戦争の歴史が示すように、宗教はときに戦闘のメタファー（隠喩）であったが、日本では一般にそれは人々の幸せと平和を願うものとのイメージが強い。それが裏切られたからこそショックを受けたのだろう。

「世界各地に都市国家が出現した古代に、人々を結束させたのがさまざまな宗教だった。都市国家は常時戦闘状態にあったが、それは宗教共同体同士の戦闘でもあった。また西洋に限っても十字軍など宗教の軍事活動を肯定する考えがあった」

「しかし日本の場合、神道がもともと戦闘を好まないところに、仏教やキリスト教も暴力や戦争を肯定しないものとして伝わった。なるほど日本にも戦闘集団としての僧兵があったが、これは必要にかられて武装したもの。また内輪もめを越えた宗教大戦争を日本人は知らない。だから宗教的な暴力の可能性が真剣に受け止められてこなかった」

――一宗教団体が、国に暴力で立ち向かうのは、ちょっと無謀という気がするが。

「弱者が暴力に訴えるのは無謀そのもの。そこには計算が必要だ。軍事的には失敗しても人々に衝撃を与えて、思考と行動を変化させ、将来それが大きな勢力になっていくことを期待する。ツァーリズムに反対する爆弾闘争がそうだったし、トロツキズムも、階級対立がのっぴきならないところにきていて、きっかけさえあれば群衆の武装蜂起が起きると判断したから、暴力に訴えた」

「他方、すべてはまだ疑惑の段階だが、オウムの暴力はテロリズムと言っていい。テロは大衆に共感ではなく恐怖を与えて、彼らを操作しようとする。それには無差別殺人が有効。人々は、次の犠牲者は自分かもしれないと思い、社会が混乱していく。ここでは暴力が発する情報に意味があるわけだ」

――無差別殺人の一方、拉致事件など標的をしぼった暴力がある。これは組織維持のためと考えられ、テロとはまた別の暴力のはずだが。

「その根底には修行をつみ、一刻も早く解脱をと願う彼らの切迫した現実感と、今後も平穏に暮らせるだろうという私たちの現実感との対立がまずある。しかもふつう出家者は在家者と温かい交流があるのに、彼らはそれをたち、反社会的と抗議されると、もっと敷居を高くし、在家との間に壁をつくっていった」

「彼らはもちろん自分たちの現実が正しいと考えていて、これを認めさせることを『救済計画』と呼んだ。その計画を妨害することは、彼らにとって陰謀になる。だからこちらも対抗措置をとらなくては、と反社会的行為に走ったのでは。だれもオウムを抹殺するまでの意図は持っていなかったのに、それを陰謀と彼らがとったのは、私たちの現実を否定する彼らの強い意志の反映と見るべきだ」

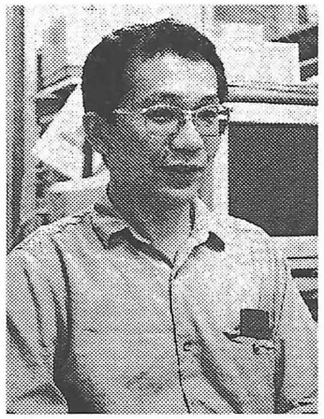
――オウムの暴力性は、革命左翼の非合法活動に類似する反面、二つにはとうぜん違いもあるはずだ。

「世俗の法律に反する行為が当人なりのモラルにかなうという点で、確かに二つは似ている。だが、決定的な違いは、極左集団は暴力革命が目的だから必ず武装し、反社会的活動をするのに対し、オウムは出家する段階で非合法活動をするという合意などできていないことだ。出家者は最初から軍隊なのではないのだ」

――それが武装しだすのはハルマゲドン（最終戦争）と関係があるわけだが。

「オウムは速さを一つのテーマとしている。スピーディーに解脱できる科学的修行法が売り物だった。そして通常の説法では時間がかかるので、無差別殺人で社会を混乱させ、『救済計画』のすみやかな実現をはかろうとした。それがハルマゲドンの予告編としてのサリン事件だったのでは」

（聞き手・菅原　教夫記者）



はしづめ・だいさぶろう

東京工業大学助教授（社会学）。1948年神奈川県生まれ。構造主義を踏まえて、新しい社会理論を構築する仕事を精力的に続けている。著書に「仏教の言説戦略」「言語ゲームと社会理論」「性愛論」など。

1995年（平成7年）3月29日　水曜日　2版　B
夕刊　讀賣新聞

広告特集
価値の再編とめまぐる時代のキーワード
Think!

識者のみなさんにも聞きました

Q1　あなたは過去の自分に戻れるとしたら、何歳ごろに戻りたいですか。

Q2　人生の節目で、あなたはどのように考え、行動するでしょうか。現在のあなたの考えに最も近いものを選んで下さい。すでに経験されてしまった方は、もう一度その時がきたらどうするか、を考えてください。

(1)社会人としてスタートする時が来ました。どんな進路を希望しますか。
❶職種は問わないが、有名企業で働きたい ❷忙しくても、やりがいのもてる職業を選びたい ❸高収入が得られれば、仕事の内容は問わない ❹自分の才能を生かせる職業につきたい ❺将来、独立できるような職業を選びたい ❻自分の時間を大切にしたいので、時間的余裕のある仕事がいい ❼家業を継ぐ ❽とりあえず定職はもたずに、自由に生きたい ❾その他

(2)あなたは結婚することになりました。どんな家庭（夫婦関係）を築きたいですか。
❶お互いが仕事を持ち、家事もそれぞれ分担し、お互いを尊重し合う ❷妻は家庭を守り、夫は仕事に専念できるようにしたい ❸妻は家事、夫は仕事が基本だが、夫が家事を手伝ったり、妻が仕事を持つのもいい ❹できるだけ一緒にいたいので同じ仕事をし、家事も一緒にしたい ❺その他

(3)結婚後しばらくして、子供が誕生しました。あなたは子どもをどのように育てていくつもりですか。
❶幼いうちから塾に通わせ、一流の学校に進ませる ❷周りの親たちを見て、人並みの教育をさせる ❸勉強に限らず得意分野を見いだし、それを伸ばすようにする ❹学歴や才能よりも、性格のよい子に育てたい ❺いつまでも親に甘えない、独立心の強い子供に育てたい ❻勉強よりも、しつけをきっちりと身に付けさせたい ❼放任主義で、子供に自由な人生を歩ませたい ❽その他

(4)子供も独立し、そろそろ老後のことも考えなければならない年齢になってきました。あなたは老後をどのように生活したいですか（収入がなくても生活はできるとお考え下さい）。
❶子供や孫と一緒にのんびりと過ごしたい ❷子供の世話にならず、体が続くまで働きたい ❸高齢者用施設などで、同世代の人たちと暮らしたい ❹環境のいい郊外などで、夫婦だけで過ごしたい ❺第2の人生として、何かに打ち込みたい ❻その他

Q3　最近、身の回りのことであなたが最も関心を持っている問題は何ですか。

Q4　最近、社会問題やニュースなどで最も関心を持っている問題は何ですか。

●私たちはこう考える

■橋爪大三郎さん（東京工業大学助教授）

1 戻りたくない。
2 (1)❹（自分の才能……）　(2)❶　(3)❺　(4)❷
3 大学をもう少しまともな組織にできないかということ。私の講義をCD－ROMにしていつでもだれでも受講できるようにしたいということ。グループ合宿や研修旅行など新しい授業形態を成功させたいということ。
4 地球環境問題が、のっぴきならないところまで来ている。炭酸ガスの排出を抑えるために、わが国も「炭素税」を導入すべきだ。それを基金に、国際環境援助に取り組もう。従来型ODAはもはや時代遅れである。

1995-45-⑧/9

Time Out

The world according to Sophie

Gentle introduction to philosophy attracts large readership

By KYOKO SATO
Staff writer

Elementary school kids have said they enjoyed the book, as have people in their 80s and 90s. And believe it or not, the book is over 600 pages long, and its subject is philosophy.

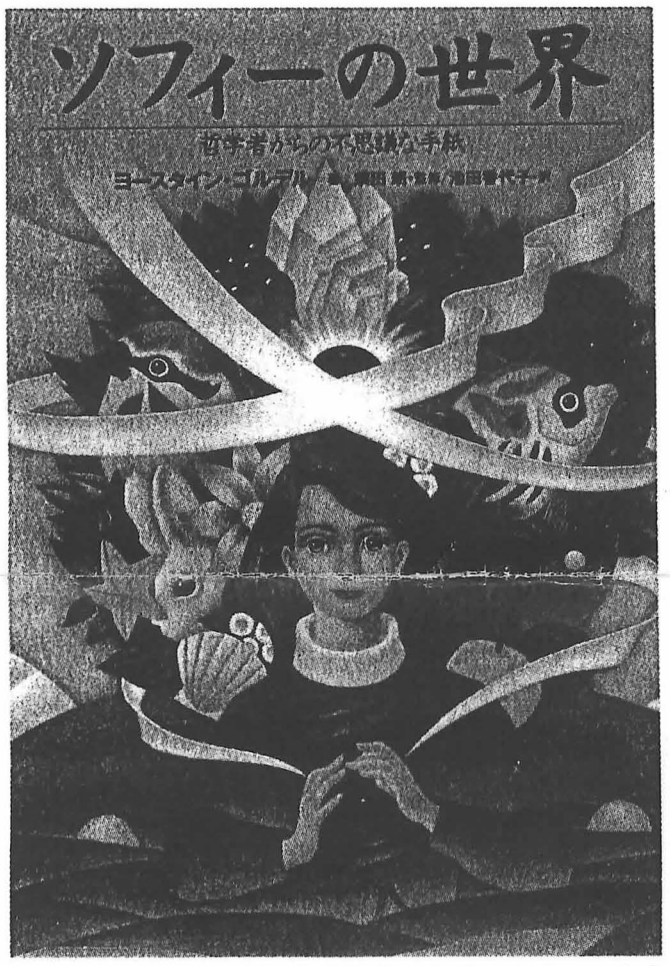
Read by people from all walks of life, the Japanese translation of "Sophie's World," a Norwegian novel about a 14-year-old girl's journey into the history of philosophy, has sold more than 1 million copies since it came out in June.

The secret of the book's success lies in its accessibility. Sophie Amundsen's adventure begins after she receives a letter posing two questions: "Who are you?" and "Where does the world come from?" Taking the form of a fantasy-mystery story, "Sophie's World" is an easy-to-read introduction to Western philosophy's origins and its evolution, from Socrates to Sartre. Despite its weighty content, the genre-crossing book is expected to be the best-selling fiction at many bookstores in Japan.

Author Jostein Gaarder, who was recently in Japan to promote "Sophie's World," says he didn't expect it to sell well. First published in Norway in 1991, the book has been published in 39 countries and sold more than 4.7 million copies worldwide, including 1.5 million in Germany. The 43-year-old former philosophy teacher from Oslo says he simply wanted to present a history of Western philosophy that could be enjoyed by the whole family.

In Japan, where a philosophy book that sells 10,000 copies is usually considered a hit, the popularity of "Sophie's World" is unusual. However, it is neither the first nor the only philosophy book to sell well. Over the past few years, many introductory philosophy books have come out and enjoyed substantial sales. Many have topped the 10,000 mark and a few have sold over 100,000 copies.

Utako Nishida of Kinokuniya Bookstore in Shinjuku, Tokyo, says she has seen a steady increase in the popularity of books on philosophy, especially introductory books on Western and contemporary thought. She says the public interest in new religions and mysticism in the early '90s has gone into a decline, and that it was accelerated by the incidents involving Aum Shinrikyo.



DISCOVERY — "Sophie's World," Jostein Gaarder's novel of a young girl's journey into philosophy, has been published in 39 countries.

"The interest in Western and contemporary thought skyrocketed this year with 'Sophie's World,' " Nishida says.

The book's publisher, Japan Broadcast Publishing Co., has received more than 2,000 letters, sent from readers ranging in age from 9 to 98, from students to businesspeople to housewives.

"For many student readers, the book seems to reassure them that wondering about certain things in their everyday life is a form of philosophy," says Nobuko Ikari, the book's editor at Japan Broadcast Publishing Co. "Young office workers tend to express regret that they hadn't encountered the book earlier, when they were students, and that they didn't have much interest in pursuing intellectual stimuli then. Some say they would have majored in philosophy in college if they'd known more about it."

Akira Suda, a philosophy professor at Chuo University who supervised translation of the book into Japanese, says "Sophie's World" is the perfect introduction to Western philosophy: It's fun, exciting and requires no prior knowledge of philosophy. It also connects questions everyone asks in adolescence — "Who am I?" or "Where do people go when they die?" — to the canon of Western philosophy. Suda points out that many "philosophy" books tend to be either merely about someone's personal philosophy on life or they are too stiff and difficult for those without a certain amount of philosophical knowledge.

It is often pointed out that the current education system's emphasis on rote learning tends to discourage independent thinking. Suda says kids today don't have the time to think about these questions about their life and existence, because they are too occupied with preparing entrance exams. "But these questions are universal and can't be repressed forever. They will come out later in life.

"When they do, people don't have access to philosophical thought because there are so few good introductory books. Then some turn to cults and mysticism for handy solutions, like they did after the collapse of the bubble economy."

Daisaburo Hashizume, sociology professor at Tokyo Institute of Technology, says that the current boom of accessible philosophy is a natural reaction against the new academic boom in the '80s that focused on postmodernism and poststructuralism and which is now perceived as being too esoteric.

"The current boom is based on the public's desire to think about human beings on a more personal level through philosophy," Hashizume says. "Such desires are coming forward now since people have become frustrated with and uneasy about the present mass-media environment, which encourages only temporary gratification."

Hashizume says that because of the transitory nature of contemporary media, people turn to philosophy and religion in order to feel a connection with people of other times, to feel how humans haven't changed, and how people are the same in any era.

"It's universal: When you understand the legacy of culture in your own way, and realize that you can bridge this past with the present and the future, then you can understand the meaning of life," Hashizume says.

Author Gaarder attributes his book's worldwide success to the common need for this understanding. He says philosophy, once a forgotten genre, is now having a renaissance in some countries as people have started seeking a common ground in postmodern society.

"All human beings need some sort of holistic perspective. I don't live only my own life — I'm part of and I take part in something that is larger than myself. Otherwise, I would in truth live without hope," he says. "To have a good grip on my own life, I need to grasp my roots in history. I think it's important to know one's historical premises."

Gaarder says that when wondering about existence, people can easily throw themselves into something like New Age mysticism and alternative philosophies instead of thinking with their own brain.

"Much of this alternative material has just as little to do with real philosophy as pornography has to do with real love," Gaarder says. "Both philosophy and love require some time and deepening — there are no shortcuts either to real love or to real philosophical insight."

Gaarder encourages Japanese to learn more about Eastern thinking. In fact, in their letters to the publisher of Gaarder's book, some readers said they wished there was a similar book introducing the Eastern philosophical tradition.

"I feel that in Japan many people here have too little connection with Eastern philosophy," Gaarder says.

"If I knew that this book would become such a great success in Japan, I would have written a preface saying, 'You're reading about European philosophy and European culture, but please don't forget your own roots. Please dig also in Japanese intellectual history, because there are so many interesting and important things there.' "

Poet from

By TOSHIMI I

In order t
selves creativ
we must eng
mind and al
when speakin
we use the ey
pression will
orless. The ey
tions togethe
poetic expres

Poetic exp
emerges fron
emotional n
then, to gras
of pregnant s
awaken both
emotions.

If the heart
with the hea
perceive poeti
increase and
discriminator
poem of min
tion illustrat

daphn
moonli
their

I look up
blooming hig
feel the g
moonlight to
ne. I smell t
ing in the mo
ening the air.
of the earth i

Thus, upon
er blooming
simultaneou
smell, touch
heard sound
counter suc
ence, joy rip
ters of our i
and animates
leading us to
ty.

Our menta
faculties are
gether by a si
a poetic exp
even one poin
whole cord
the senses ei
slightly but
interact as
whole.

As a secon
phenomenon,
a scene I
winter night.

The therm
degrees bel
thing seeme
full moon b

Videos help teach manners to kids and par

By N.F. MENDOZA
Los Angeles Times

HOLLYWOOD — There aren't many kids today who understand the concept of minding their "Ps and Qs." For that

pressly for the younger set: the Parents' Choice award-winning "Amazing Advantage for Kids: What Every Kid Should Know About Manners and Etiquette" and "It's Just Good Manners."

Alan Green, daily life with the two eldest of his five children (then 6 and 8, now 15 and 17) gave him the idea of making a video about deportment. For "Good Manners" producer

Joshua Swen
ing a cours
Your Manne
Seasons Ho
Beach, Calif
popular five-

図書新聞
THE BOOK REVIEW PRESS
2268号
特別
定価270円
（本体262円）
構成原案
菊地信義

1995-45-9/9

特集 丸山真男と戦後思想

戦後50年にあたる節目の年に、戦後日本の思想界に大きな影響を与え続けてきた丸山真男氏の著作集が刊行の運びとなった（『丸山眞男集』全16巻・別巻1、岩波書店刊）。肯定するにせよ、また乗り越えるべき対象として批判するにせよ、きわめて問題的な存在として氏はわれわれの前にある。とりわけ戦後思想の変遷の中で、丸山真男とは何であったのか。われわれは彼から何をひきつぐことができるのか、11人の執筆者にそれぞれの立場からアプローチしていただく。

【2・3面】

大越愛子　橋爪大三郎　長崎浩
都築勉　高橋順一　福田和也
佐高信　佐伯啓思　関曠野

丸山政治学と「だまされ史観」

戦争責任のあいまいな決着

橋爪大三郎
hashizume daizaburō

戦後知識人たちに期待されたことのひとつは、戦争責任問題の解決だった。

敗戦国日本は、自らがひき起こした戦争を侵略・犯罪と断罪し、その責任を自分の手で追及しおえて、はじめて国際社会に復帰できる。近代の原則から言えば、すべては人間の意志によってひき起こされる。誰がいつどのように戦争を「意志」したのか、その事実関係を確定することが、戦争責任論の出発点となる。

『日本政治思想史研究』で「作為の契機」を強調した丸山真男は、こうした近代の原則に忠実なところから出発したようにみえる。作為とは意志の別名であり、近代的な政治意識のメルクマールにほかならない。ところが丸山真男が、戦争を指揮したはずの日本の指導層に実際に見出したのはその反対に、意志決定の不在だった。天皇はもちろんのこと、首相も、軍首脳も、誰もが個人的には戦争を避けようとしながらずるずると、時代の雰囲気に呑まれて、開戦への道を歩まされていった。——指導者の日記や東京裁判での証言をつなげていくと、このようになる。

山本七平流に言えば、「空気」の支配である。多くの日本人は、抑圧移譲の仮説にもとづく丸山の超国家主義の分析（集合的無責任論）に、説得力を感じた。だが、これは、微妙な問題を含んでいた。第一にこれは、連合国が敗戦国日本を裁いた東京裁判の考え方（日本の指導層は共同謀議をして侵略戦争をひき起こし、人類に対する罪を犯した）に、水を指すものだ。たにしろ、指導者たちはその気もないのに、いつの間にかずるずると戦争にひき込まれてしまった、というのだから。第二に、国民はおろか指導層まで戦争をやるつもりはなかったとすると、そもそも「戦争責任」の成り立ちようがなくなる。戦争をやると決断し、命じた人間がいるからこそ、戦争責任が成立する。戦争に巻き込まれただけなら、被害者でしかない。そして日本には、どうやら被害者しかみつからないのだ。

丸山の分析は、純然たる近代主義の立場で、日本の政治システムの前近代性を暴き出すというスタイルをとっている。そのため丸山政治学は、戦後の知的言論のもっとも正統な学説となった。しかしその結果、戦後のわれわれは、戦争をひき起こした指導層の責任を本当の意味で追及することが不可能になった。そして、軍部の暴走→圧倒的大多数の国民は戦争の被害者、という「だまされ史観」が定着することになる。いまも八月になるとテレビや新聞が、原爆の悲惨、空襲の被災、疎開の苦労といった被害譚ばかりを流しているのも、その影響である。こうした戦争責任のあいまいな決着は実は、冷戦を迎え、日本を自由陣営の一角と位置づけ直した当時のアメリカの世界戦略にも合致していた。

いま日本は、普通の国、いや正常な国へと否応なく歩み出しつつある。それには、日本の過去と直面することが不可欠だ。丸山政治学の再検討が、必須となる所以である。

（東京工業大学教授・社会学）